

2018 - 04 - 14

共創型社会におけるミュージアムの役割

小川 義和
国立科学博物館

[国立科学博物館ホームページへ](#)

1 今求められる「共創型社会」

現代の課題は様々な要因が絡み合い複雑になっています。その解決には、科学者と技術者の集団（以下、科学コミュニティと表記）だけでは困難で、社会の多様な関係者が知恵を出し合い、協働して、新たな知を創造していくが必要になってきています。このような共創型社会において博物館はどのような役割を期待されているのでしょうか。

2 博物館の歴史と変遷

博物館は、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を集め、保管し、調査研究し、一般の人々に公開している施設です。特に科学系博物館は科学的な知識と資料を人々に提示し、人々の科学理解を増進する役割を担っています。大正時代の東京教育博物館（国立科学博物館の前身）は、コレラ病の予防、災害防止、時間などに関する特別展覧会を開催し、当時の人々のリテラシーを涵養し、安全で、効率的な社会生活を営むことに貢献しました。

現代においても人々は博物館に対し知識を獲得する場として期待し、博物館も人々に知識を提供するために調査研究し、学術情報とその証拠である資料を収集保管し、展示・公開するように努めています。国立科学博物館においても、自然史、科学技術史の調査研究を行い、452万点を超える標本資料を収集保管し、上野本館、筑波実験植物園、附属自然教育園にて標本資料の展示・公開を行い、年間288万人を超える方にご見学いただいております。

3 キーワードは「サイエンスコミュニケーション」

ところが、人には感染しないとされていた狂牛病が人に感染した問題など、現代の科学的諸課題の解決には、人々に科学的知識を普及することに加え、科学コミュニティと一般の人々との対話を以前よりも強く意識せざるをえません。現代社会において博物館は科学理解増進に加え、科学コミュニティと一般の人々との対話、すなわちサイエンスコミュニケーションを促す役割が期待されています。国立科学博物館においては、研究者が来館者と直接解説や対話を行う活動やボランティアが標本資料を活用して来館者に展示を紹介する活動などを展開しております。



上野本館〈10000点以上の展示資料を公開〉



総合研究棟と自然史標本棟（筑波研究施設）



筑波実験植物園〈約3000種の植物を展示公開〉



附属自然教育園〈天然記念物及び史跡である約20万m²森林緑地を公開〉

写真提供：国立科学博物館

国立科学博物館は1877（明治10）年に創設された、国立の唯一の総合科学博物館。自然史および科学技術史研究に関する中核的研究機関として、452万点を超えるコレクションを保管。

4 サイエンスコミュニケーションで共創型社会を支える

当初サイエンスコミュニケーションについては、専門家と一般の人々、科学と社会を相対する関係として捉え、両者をつなぐための対話機能と位置づけられていました。しかし東日本大震災後の様々な課題は、専門家と一般の人々の間をつなぐだけでは解決には至りません。そこでは、専門家と一般の人々の間の「対話モデル」だけでなく、課題に対し多様な社会的集団が連携し、知を共有し、創造し、社会に変革をもたらすようなモデルを想定する必要があります。

例えば、地域の自然環境の保全の意識を高めるために、「市民学芸員」として市民が学芸員とともに調査研究を行い、その調査した成果を展示している博物館、また福祉施設等と連携し、博物館の資料を活用した回想法による高齢者の生活の質向上や世代間の交流、ひいては地域の活性化に取り組んでいる博物館があります。

5 これからのミュージアム

これからのミュージアムは、施設としての博物館と、博物館を取り巻く環境を含めた文化空間と考えることができます。その空間でミュージアムは機能を発揮します。この機能は、サイエンスコミュニケーション

の「対話モデル」を一步進め、人と人、世代をつなぐ知のプラットフォームと言えます。これを、地域におけるサイエンスコミュニケーションの一形態と考え、博物館が地域の知を産み、知を次世代に継承するという役割を果たすことから「知産知承モデル」と称しています。ミュージアムは、知のプラットフォームとして、地域の歴史、芸術、民俗、産業、自然を人々とともに再発見し、その価値を高め、将来にわたって継承し、地域の文化を醸成していきます。

Profile

国立科学博物館
連携推進・学習センター長

小川 義和 氏
OGAWA Yoshikazu

1960年生まれ。博士（教育学）。国立科学博物館 経営計画室長、学習課長、附属自然教育園長等を経て現在に至る。日本ミュージアム・マネジメント学会副会長、日本博物館協会編集委員、日本サイエンスコミュニケーション協会副会長等。著書に『科学を伝え、社会とつなぐ サイエンスコミュニケーションのはじめかた』丸善出版（編著）、『観光資源としての博物館』芙蓉書房出版（共著）、『現代の事例から学ぶ サイエンスコミュニケーション』慶応義塾大学出版（監訳）など。



